



Title	〔作品紹介〕 ルシア・ヒラツカ 『サユリの本』
Author(s)	ヒラツカ, ルシア; 平田, 恵津子
Citation	ブラジル研究. 2012, 8, p. 61-89
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/106534
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〔作品紹介〕

ルシア・ヒラツカ『サユリの本』

平田 恵津子 解説・訳

作者と作品について¹

本稿で紹介する『サユリの本』(*Os livros de Sayuri*)は日系ブラジル人三世のルシア・ヒラツカによって書かれた児童文学作品で、2008年、日本人のブラジル移住100周年を機にブラジルで出版された。素朴な雰囲気醸し出す挿絵は、画家でもあるヒラツカが、幼い頃、いつも地面に描いていた絵の筆触を想起させるためにグラフィイト鉛筆を使用して描いたものである。

ルシア・ヒラツカは、1960年、一家が経営するサンパウロ州内陸部ドゥアトリーナの小農場で生まれた。作家自身の回想によると、「朝日」と名づけられたその小農場で、幼い頃、祖母から棒きれで地面に絵を描くことの楽しさを、そして、祖父からは主に日本語の絵本をとおして読むことの喜びを学んだ。後にヒラツカがポルトガル語に翻訳し、挿絵をつけて出版することにな

る日本の昔話の多くは、この頃、祖父に読み聞かせてもらったものである。15歳のとき、州都サンパウロ市に移り住み、大学では美術を専攻している。1988年、留学生として来日し、福岡教育大学で約一年間、絵本の研究をした後、ブラジルに戻ってからは、『一寸法師』や『笠地蔵』など日本の民話や伝説をポルトガル語に翻訳するかたわら、リアとニコという名の少年少女を主人公にした創作童話シリーズを刊行している。

『サユリの本』は、ヒラツカがこれまでにブラジルの日本移民をテーマにして書いた唯一の作品であり、第2次大戦が勃発した頃、ブラジルで学齢期を迎えたヒラツカの母親の記憶に想を得て創作されている。大戦下、日本の敵性国となったブラジルでは日本語の使用や集会が禁止され、日本語学校も閉鎖されるなど、日本人移民を取り巻く情勢は次第に厳しくなっていた。本作品は、当時の緊張に満ちた日常を、小学校へあがる年齢に達したばかりの少女サユリの視点から描いたものである。読み書きを習いたい、自分で本が読めるようになりたい、と一心に願うサユリが抱く不安や喜び、好奇心は、ヒラツカの母親が幼い頃に味わった思いに重なる。日本語学校の閉鎖後、田舎の暗い夜道をランタンの灯りに導かれ、場所を移しながら隠れて勉強をする子供たちや、監視の目を逃れるために日本語の書物を土のなかに埋めるおとなたちのエピソードは、ヒラツカが母親から語り聞かされた思い出話にもとづいている。とりわけ地中に埋められた本のイメージは脳裏に焼きついたと後書きで述べられている。サユリの物語は、戦争がいかに暗い影を子供たちに投げかけるかについて控えめに訴えかける一方、作者自身の本に対する愛情が込められたものでもある。

B6版で約140ページの、手のひらに収まるほどの大きさの『サユリの本』は、2009年度「につけい文芸賞」(“Prêmio Literário Nikkey”) ²ポルトガル語部門で入賞した。その授賞式において審査委員のヨウジ・フジヤマは、本作品について、「一見、子ども向けの本のようであるが、読み進むにつれて、それがより複雑なテーマをもち、おとなも関心をもって読むことのできる本であることに気づかされる」 ³と評し、さらに、「大戦勃発直前の時代を生きてい

ない多くの者たちにとって、当時、両親や祖父母が経験したこと、つまり、日本語で書かれた書物や手紙、書類を搜索、押収されたことについての記述は、遠い昔の、非現実的で、非個人的な残響のようであろうが、この小品は私たちの心を揺さぶると同時に、戦争がさまざまな状況でひとの純粋さと情愛を傷つけようとするものであることに考えをいたらせる」⁴と指摘している。

紙幅の都合上、今回は『サユリの本』の前半部分のみ訳出する。いずれ完全な形で刊行し、日本だけでなく、ブラジルにおいてもほとんど知られていない戦時下の日本人移民の受難の物語を日本の読者に届けられる日が来ることを、訳者だけでなく、作者ルシア・ヒラツカも願っている。

『サユリの本』（前篇）

試訳⁵

蚕が寝ているあいだに本を読んでいた母に捧げる

土の下

まるでお葬式みたい。でも誰も死んでない。裏庭では、お日さまがアボガドの木の下に掘られた穴を強く照りつける。まるでミミズの穴を見つけたみたい。いにめんどりが土の山をつつく。雲がのんびり流れていく。雨は降りそうにない。もし降ったら、延期かもしれないのに。

私たちは、カチャカチャお皿にあたるスプーンの音を聞きながら、だまってお昼ごはんを食べていた。父さんと母さんはもくもくとかんでいた。エミコ姉さんも。ユキオ兄さんだけがご飯とフェイジョン⁶とかぼちゃをおいしそうに食べていた。干し肉はかたく、かぼちゃは塩からかった。お料理するとき、きっと母さんはほかのことを考えてたんだわ。

「よし、みんな食べたか？」最初に父さんが立ちあがった。

ユキオ兄さんと母さんは一緒に居間へ行った。何をすればいいのかしら？私は台所の真ん中で立ちどまった。

「サユリ、こっちで手伝って。私はお水をくんで来るから」姉さんが井戸へ行っているあいだ、私はテーブルのお皿とお鍋をさげた。

井戸は台所から少し離れたところにある。縄にしばりつけた桶は、おろすときは、軽々とおりていく。大変なのはひっぱりあげるとき。一度やってみたけれど、私にはあげられなかった。ものすごく重くて。

エミコ姉さんが大きな缶に水を入れて、木の取っ手をつかんで持ち上げるのが見えた。私はお皿を台所のそとに運んで洗い桶に入れた。そこには仕切りがなくて、トタン屋根があるだけだ。姉さんは洗い桶に水を少し注いで、スポンジに石けんをつけると私に言った。

「余ったおかずを片づけてちょうだい」

かまどには消えそうで消えない炭火が残っていた。だからあんなに暑かったのかしら？私たちは片づけを終わって、居間へ行った。

壁には死んだおじいちゃんとおばあちゃんの黄色くなった写真。母さんのお父さんとお母さんだ。もう少し上のほうには神棚。そして別の壁の棚はほとんど空っぽ。すごく変な感じ。本が1冊もないんだもの。父さんが切りかぶで作った牛と亀はまだそこにあった。そしてランプも。

父さんと母さんはとうもろこしの皮と新聞を詰めた木箱に本をいれた。

「あなたたちのところにあるのも持ってきてなさい」母さんが言った。

「おいで、サユリ」姉さんが私を呼んだので、一緒に部屋へ行った。

エミコ姉さんは棚にある本をとっては急いで私に渡した。私たちは山のよう
に積んだ本を手を抱えて戻った。聞きたいことがたくさんあった…でもお
となたちがあんまり黙りこくっていたから…まるで柿のたねがのどに詰まっ
たみたいで、質問は出てこなかった。

私たちの本は全部埋められることになっていた。家の中に置いてちやいけ
なかったから。1冊だって。

エミコ姉さんが部屋から運んで来た本を見せた。

「あら、まだこんなに？入るかしら？」母さんは言った。

入りませんように、入りませんように、私は祈った。でもだめだった。こ
っちにぎゅうぎゅう、あっちにぎゅうぎゅう、全部箱のなかに入ってしまった。
そして、本は古新聞ととうもろこしの皮でおおわれた。

私はこっそり父さんたちの部屋を見に行った。ベッドのそばのみかん箱の
上におかれていた本はもうなかった。小さなランプとバターのふたに立つろ
うそくがあるだけ。私は居間にもどった。父さんが木箱をとじようと釘で打
ちつけていた。

「ユキオ、そっちを持ってくれ」

母さんとエミコ姉さんが手伝おうとかけ寄って、一緒に箱を外に運び出し
た。アボガドの木の下では、めんどりとひよこたちが相変わらずのんびりと
地面をつついていた。私が手をたたくと、ニワトリたちはブランコがかかっ
ているグアバの木の方へ逃げていった。

セミが鳴き始めた。えっ？いきなり？どこに隠れていたの？セミは見つか
らなかった。必死で鳴いている。

「私たちがしているのは正しいことなのかしら？」母さんの声が弱々しく
聞こえた。

この質問はお昼ごはんのときから、母さんがごはんのしたくをしていると
きから、朝から、母さんのなかにあつたんだわ。ううん、きっと昨日から。
父さんはシャベルをもって、土をかけていった。そうして木箱は埋められた。

まるで本が死んでしまったかのよう。それとも、まるで宝物みたいに？死んだ人は帰って来ない。でも宝物は？いつか戻って来るかしら？埋めて隠されている宝物のお話と同じように？

父さんが小さな声で言った。

「すぐに全部掘り起こせるさ」

「ほんとにすぐそうになってほしいわ」

母さんの声に力はなかった。

「戦争が終われば…」父さんが話そうとして、やめた。

戦争。この言葉が家のなかに入ってきて、もうしばらくたった。まるでお化けみたい。父さんはお化けなんかいないって言うけれど、私はこわくて死にそう。顔をかくして、突然、出てくるんだわ。大人たちは、戦争のことを話す時、私に聞こえないように小さな声で話す。

がまんができなくて、聞いてしまった。

「誰か死ぬの？」

父さんと母さんは聞きたくなかったことを聞いたってような顔をした。

「誰も死にはしないよ。戦争は地球の反対側で起きてるんだ」父さんは言った。

地球の反対側？もし地球の反対側だったら、どうして本を隠さなくちゃいけないの？どうして死んだ人みたいに埋めるの？ううん、母さんは、死んだ人は土の下には埋められないって言ってた。ほかの場所へ行くって。もし雨が降ったら？教えてほしくて、父さんたちの方を見たけど、何も話したくないって顔をしてた。

セミはまだしばらく鳴いていた。

お日様がユーカリの木の方こうに隠れた。するとめんどりたちは寝に行き、夜が星をばらまいていった。ひとつずつ、それから、ひとつかみずつ、それからたくさんの星を…ランプをともし時間。夜がやって来ると、ランプは私の一番の友だち。闇をちょっと追い払ってくれる。おしっこに行く時がそう。だって、トイレは家の外にあるんだもの。こわくて…

私はずっと土の下の本のことを考えていた。エミコ姉さんは早めにベッドへ入り、ユキオ兄さんも自分の部屋へ行った。母さんは居間でガマの葉っぱをこっちからあっち、あっちからこっちへと動かしながらゾウリを作っていた。父さんは木の切れっぱしを手にとって、何かほり始めた。トック、トック、トック…時計のチクタクの音に合わせて。明日は？何が起きるのかしら？

私だけの本

父さんと母さんに見つかりませんように。姉さんと兄さんにも。うちの誰にも見つからちゃだめ、本を隠してることを。自分だけの本を持ってるって、なんてすてき！まるでレタスの葉っぱの上にカタツムリを見つけたときの気持ちみたい。この虫は私のよ、誰にも渡さない、って。

～～～

もしユキオ兄さんに教えたら、近所の人たちにしゃべってしまう。エミコ姉さんにも教えてあげない。姉さんは私に命令してばかりいるんだもの。サユリ、これをしなさい。サユリ、そんな風にやっちゃだめ。年が私の倍だからって、自分はおとなだと思ってる。私が本を隠しているのを知ったら、きつこう言うに決まってる。何ですって？そんなことしちゃいけないのよ。父さんが言ったことを聞いてなかったの？うちに本を１冊も置いちゃいけないって。

その本は母さんのだった。いつか私がもらうはずの。だから少しくらいはもう私のものだった。それが全部私のものになったということ。私だけのものに。

あの日、母さんは自分の部屋の長持ながもちをかたづけていた。それは竹でできた大きくて深い箱で、母さんはそこにいろんなものをしまっていた。服にタオ

ルに写真にこけしの人形。いっしょに本も何冊かしまってた。そばにいた私は聞いた。

「母さん、その本は？」

「これがどうしたの？」

「まだ読んでくれたことがないわ」

母さんは父さんのチェック柄のシャツをたたんでから、ほかの服といっしょにしまうと、かたづけをやめた。赤土色の表紙の本を手にとって、じっと見つめながら、ゆっくりなでた。

「これは私がお母さんからもらったものなの」

「おばあちゃんから？」

「そう。私が3年生にあがったときにくれたの。本を開いたときは本当にうれしかったわ！読み書きを習っているときだったのよ」

母さんは少し黙ると、悲しそうな声で言った。

「かわいそうなおばあちゃん。きっと戻るって約束したのに。私たちは1年たっても帰らなかった。2年…そして3年たっても。待ちくたびれて、二度と私の顔を見ないで死んじゃった。そしてそのすぐ後におじいちゃんも」

その話はもう何度も聞いていた…母さんがおじいちゃんたちのことを話すときはいつも悲しそう。私は母さんの悲しそうな顔を見たくなかった。本について知りたかった。

「ねえ、母さん。そこにはどんなお話が書いてあるの？私に読んでくれないの？」

「そうよ。これはあなたがひとりで読むのよ」

「でも私には読めない」

「読めるようになったら、この本はあなたにあげるわ」

「ほんと？」

「それまでここにしっかりしまっておくわね」

私は、母さんがその本を、長持のなかにある黒っぽい表紙のぶ厚い本のあいだにしまうのをじっと見つめた。今すぐくれてもいいのに、と思った。も

うすぐ学校にあがるんだから。あんなことさえ起きなかったら、すぐに読めるようになるのに。ちょっと心配になった。父さんは言わなかったかしら？家に本は1冊も置いてちゃいけないって。どこかもっといい場所にかくさなくちゃ。どこに？埋めた方がいいかしら？ううん、それはだめ。

～～～

私は廊下にかくれて聞いた。大人たちがひそひそ話をするのは、私とユキオ兄さんに聞かれたくないとき。兄さんはもう10歳だから、ときどきそこにも大丈夫。でも私は？すぐに自分の部屋へ行くよう言われる。いつになったら聞かせてくれるの？私はエミコ姉さんみたいになりたかった。そう、姉さんみたいに。姉さんはなんでも知っている。地球の反対側で起きてることも。聞かせてくれないなら、かくれて聞くしかないわ。

あの晩なにか知らせがあったことはわかっていた。大人たちがひそひそ話している様子からすると、いい知らせじゃなさそうだった。私は暗やみのなかでじっと壁にもたれながら、父さんと母さんとエミコ姉さんの声を聞いていた。何を話してるのかしら。よく聞こえないから、もっとそばに寄らなくちゃいけなかった。

「ほんとにやって来るのかしら？こんなへんぴなところにある私たちの農場にまで」母さんの声だった。

「来るって話でもちきりだ」父さんが答えた。「男たちが町から町、家から家へかたっぱしから回っているらしい」

「ほんとう、お父さん？ただの噂じゃないの？」

「町で知り合いから聞いたんだ。兵隊が家じゅう、ひっかきまわすらしい…武器を見つけたら、むろん持って行くし、本を見つけたら、全部焼いてしまうそうだ」

「でもお父さん、家にある本は何の問題もないじゃない」

「それをどうやってわからせるんだ？全部日本語じゃないか…」

「どうしましょう？どこに隠せばいいかしら？」母さんの声は不安そうだった。

「埋めるしかないな」

「埋める？それより物置か穀物倉庫にかくすのはどう？」エミコ姉さんが言った。

「だめだ。そこも調べられるだろう。もし見つかったら、我われもつかまるらしい。明日埋めることにしよう」

「もう少し待った方がよくないかしら？どんな具合か様子を見てみましょうよ」母さんは言った。

「明日だ。大きな木箱を探して埋めるんだ」父さんは決めた。

私のものになるはずだったあの本は？だめ。あれは埋めちゃだめ。絶対に。私は猫みたいにそっと父さんたちの部屋へ行った。こんなときに猫の目をしてたら、もっと楽ちんなのに。猫は暗いところでも見えてるみたいなんだもの。でも私はあの本がどこにあるかちゃんとわかってる。父さんたちが寝に来る前に持ち出さなくちゃ。

手さぐりで、母さんがぶ厚い本のあいだにしまった本を見つけた。私はそれをつかむと自分の部屋まで持って行っった。そして、エミコ姉さんがやって来る前に、あわててマットレスの下にかくした。

私は何も悪いことなんかしていない。どうして待つてなくちゃいけないの？どうせ私のものになるんだもの、母さんが約束してくれたんだもの。もし埋められたら、どうなるの？父さんは、本は戻って来るって言った。でもいつ？大人たちが「いつか」って言うときは、すごく先のことか、絶対にやって来ない日のこと。

それぞれの味

食べものにだけ味があるんじゃないのよ、母さんはいつも言う。しかられる

と青い柿の味がする。やさしい気持ちはよく熟れた柿の味。腹が立つと？味噌で煮たナスの味がする。父さんはすごくおいしいって言うけれど、私には全然わからない。

私だけのものの味、自分の本を持ってるってこと、家にだれもいないときにだけ見るってこと。それはどんな味かしら？

みんなが仕事に出かけると、エミコ姉さんと一緒に使っている部屋は私だけのもの。それは私が本を開いてもいいとき。1ページずつめくってもいいとき。まっすぐの線や、まがった線でいっぱい。きっとたくさんのお話を書いてあるのね…母さんが読んでくれたお話よりすてきかしら？

本はもう全部土の下だから、母さんが本を読むことだってできない。母さんは蚕が寝るとき、本を読んでいたのに。

父さんたちが飼っている蚕の話をしてあげる。ほんとに大食いなもの！一日中食べてる、昼も夜も。父さんたちは夜遅くまでえさをあげなくちゃいけないし、朝早く起きてまたあげなくちゃいけない。それも桑の葉っぱだけ。あんまり夢中で食べるから、ザワザワ音がする。小さいくせに食欲は大きな動物と同じ。

五日くらい食べ続けると、今度は二日くらい眠り続ける。そうしてやっと静かになる。そこで私はお願いするの。

「母さん、本を読んでもくれる？」

洗濯をして、ごはんを作って、野菜の世話をしなくちゃ…ほかに何があったかしら？いつも大忙しの母さん。服をぬって、つくろって、大根、フダンソウ、きゅうりの漬物に、パパイヤやグアバでお菓子を作って、野菜畑の世話をして…仕事は終わらない。

でもいつも何とかしてくれた。いすに座って、本を手にとってくれた。母さんの声が家のすみずみに広がっていく。夕飯のしたくを始めるまで、父さんが草取りの手伝いに呼ぶまで、蚕が目覚まして、えさをほしがるまで、母さんは急いで本を読んでもくれた。何度もねだったお話もあった。それで、

ある日、母さんはこう言った。

「あなたも読めるようにならなくちゃね。それにも味があるのよ。知ってた？」

「どんな味？」私は聞いた。「甘い、からいの？」

母さんは笑った。甘いかもしれないし、からいかもしれないし、にがいかかもしれない。ああ、にがいはだめ。にがいは大きらい。

「涙の味かもね…」母さんが言った。

私はその本を見てすぐに気に入った。なかには新しい味がかくれているみたいだった。私が全然知らない味。私の本の中身はどんな味かしら？甘い、からいの、にがいの、すっぱいの？涙の味？いいわ、試してみたい。私は、カマドドリの巣と同じ色の表紙と、黒くて大きないくつかの文字をじっと見つめた。物語の題名かしら？かどが少しすり減っていて、なかのページは黄色くなっている。

じゃあ、本をこっそり持つことの味は？熟れたグアバの味？かもね。甘くて、口のなかで少しねっとりして。見つかるかもしれないって不安なときは、変な味。砂糖を混ぜてないアボガドみたい。

私は洗濯ひもに服をつるしていった。ときどきアボガドの木の方を見たけれど、まるで何も起きなかったみたい。でも私は知っていた。あの下に本が埋められていることを。もし雨が降ったら？どうか降りませんように。でも雨が降らなければ、何も育たないって父さんが言う。蚕には葉っぱがなくなるし、ロバには草がなくなるし、私たちには果物と野菜がなくなる。でも雨がたっぷり降れば、何でもよく育つ。本のなる木も？おもしろそう。

洗濯ひもは服でいっぱいになった。母さんはほかに何を頼んだっけ？お昼ご飯のためのフダンソウを洗うこと。でもまだ少し時間がある。

裏庭へ行って、木の枝をひろい、地面をひっかいた。まっすぐの線。つぎにみじかい線。それから曲げた。間違えた。消して、最初からやり直し。すごく時間がかかった。でも私の名前ができあがった。「さゆり」私ができるたったひとつの字、私の名前。もっと書けるようになりたい。

線が言ってることを全部わかるのはどんな味かしら？地面をひっかいて、小鳥の絵を描いた。めんどりたちがじっと見ていたけれど、私の絵を見ていたのか、それとも、とうもろこしをもっとほしくて見ていたのかはわからない。もうたくさん！朝あなたたちに、たっぷりあげたでしょう？それは私が一番最初にしたお手伝い。

もし書けるようにならなかつたら？読めるようにならなかつたら？ううん、そんなことあるはずがない。ほかにどうしようもなかつたら、自分が教えるって父さんが約束してくれた。ただ、ちょっと待つようにって。でもそれはいつまで？

それは私が学校にあがる年になるまでだった。でもちょうどそのときに起きてしまった。

学校にあがる年

私は毎日めんどりにとうもろこしをあげる。めんどりたちは興奮して、えさを取り合う。ほんとにお行儀が悪い。時には私の足をつつく。でも私はこのお手伝いが好き。卵を拾い集めるのも好き。

～～～

本を埋める少し前のことだった。卵を拾い集めていたら、草むらのなかに新しい巣を見つけた。

「サユ！」

いつもそんな風に私を呼ぶのはユキオ兄さんだ。

「サユ、ハナエが呼んでるよ」

でもそれは兄さんの口まねをしたシンだった。昔はもっと一緒に遊んだのに。かくれんぼに鬼ごっこ、庭のかたつむり取り…私とユキオ兄さんと隣の

シンとセイジとで。このごろ私のことは置いてきぼり。どこかへいなくなっていた。みんな仕事を手伝ってるけど、いつものことじゃない。男の子だけで遊びたいんだわ。

ハナエが呼んでるって？私はうれしくなった。

「すぐ行く！」返事をしながら、とうもろこしをやり終えた。

囲いの柵のとびらをくぐると、シンが家の向こうの、大きなマンゴーの木がある裏庭へ走っていくのが見えた。もっとそばへ寄ると、パン焼き窯からお菓子の匂いがしてくるのがわかった。ハナエがクズウコンのビスケットを作ったんだわ。それは私の大好物だったから、もっとうれしくなった。ハナエはお菓子を作ると、いつも私のことを呼んでくれる。

「サユリ、今日は私のお父さんの誕生日なの。窯から出したばかりよ。ちょっと焦げちゃったけど」

シンとセイジの姉さんのハナエは、私が大好きな人のひとり。ハナエが私の姉さんだったらいいのに。とてもきれいでやさしくて、私をしかってばかりのエミコ姉さんとは大違い。

「ここに座って、ゆっくり食べなさい」ビスケットをバター缶に入れて、私にくれると、ハナエは台所へ行った。私はマンゴーの木の下の腰かけに座った。

のんびり食べていると、ビスケットくずを口のまわりにつけたシンが、何か言いたそうなそぶりで私の前に立ち止まった。

「何？」

「学校がなくなるって知ってた？」シンが聞いた。

私はビスケットをのどに詰まらせそうになった。そしてシンを見た。そんなこと、誰かに聞いたのかしら？

「うそよ。誰が言ったの？」

シンは私がすごく学校に行きたがっているのを知っていた。私より1年早く入ったからって、いばっていた。「いろんなことを習ってるんだ」「新しい友だちができたんだ」って自慢していた。そのうちに、私の家へやって来て、

グアバの木に登らなくなった。読み書きを習っているから、私より物知りだ
って思ってる。

「どうして学校がなくなるの？」

「父さんたちが話してるのを聞いたんだ」

「どんな話をしてたの？」

シンはビスケットを食べ終わると、私には答えないで、マンゴーの木に登
った。私が待っているのに。

「教えて、何を聞いたの？」

「どうしようかなあ。おまえの父さんに聞いたほうがいいと思うけどな」

私はじっと見ていた。シンはもっと高い枝にのぼった。話してくれる、そ
れとも、話してくれない？何も話してくれそうにないと思ったとき、シンが
木からおりて来て言った。

「学校は閉まったよ。おまえはもう学校に行けない」

「うそよ！」

「本当さ。おまえの親に聞いてみるよ」

農場から戻って来たシンの母さんが様子を見にやって来た。

「あなたたち、けんかしてるの？」

「本当なの？私は学校に入れないの？」

「シン、おまえは何を言いふらしてるの？母さんたちにもまだわからない
のよ。心配しないで、サユリ。きっと勉強できるようになるから」

私は走って家に帰った。本当なの？シンはいつも私をびっくりさせてうれ
しがる。でも、もしシンが本当のことを言っているとしたら？

その年をすごく楽しみにしていたのに。私はくりかえし聞いた。母さん、
あとどのくらい？どのくらいって、何が？私が学校にあがるまで。母さんは
笑いながら答えていた。いつまでもそんな風にうれしそうにしていられるか
しら？どうして？ユキオも最初は楽しそうに通っていたけれど、すぐに学校
は毎日じゃなくてもいい、って言い出したわ。

でも、私はきっと学校を好きになる。それから少しして、父さんたちが学

校のことを話しているのを聞いた。

「サン・ペドロ農園の学校へ行くほうがよくないかしら？あそこはポルトガル語を教えているし」母さんが言った。

「だめだ、サユリは日本語を習わないと。くにへ戻ったときにどうするんだ？」

「私たちのくににはもうここなんです。戻れる日が来るかどうか、わからないじゃないですか…」

「おまえは忘れたのか？」父さんの声は怒っているみたいだった。「親父たちが待ってるんだよ。おれは約束したんだ」それは父さんの口ぐせだった。地球の反対側で待っている父さんのお父さんとお母さんにした約束のことばかり話していた。

「サユリはここで生まれたんです。ほかの子供たちと同じように」母さんが言った。

「まわりで戦争の話をしてるんだ。あそこの子供たちはそうは思うまい。もしサユリが敵あつかいされたら？」

「ただの子供じゃないですか。戦争の何がわかるって言うんですか？」

「おとなたちが話すさ」父さんはきっぱりと言った。

「サユリがふたつの言葉を話せるようになったらどんなにいいかしら…将来はどんなかしら？」

「農場の学校は遠すぎる。歩いて1時間もかかる。おれたちの村のはすぐそこだ」

父さんたちはついに決めた。やっぱり私は村の学校へ行く。

学校。私はどっちの学校でもよかった。ただ読めるようになりたかった。だって、蚕が眠るのを待たなくていいのよ、母さんが空いてる時間を見つかるのを待たなくていいのよ。全部ひとりで読む？たくさんのことがわかるようになる…地球の反対側で起きていることも。それは最高にすてきなことだね。熟れたグアバよりすてき？そうかもね。

それなのに、学校がなくなるかもしれないだなんて。父さんたちが畑から

戻るとすぐ、私はとなりで聞いたことを聞いた。

「本当なの、父さん？」

父さんは何だか心配そうな顔をして、台所のテーブルにすわった。

「ほかに何か聞いた？」母さんがかまどのまきを動かしながら尋ねた。

「学校は閉鎖されたよ」父さんが言った。

「どうしようもないの？」

父さんは首をふって、母さんといっしょに、まじめな顔をして考えこんだ。

「どうしてなの、母さん？」

母さんは話しているのかどうなのか迷った様子で私を見た。でもどうせわかることだから、話さなくちゃいけないと思ったみたい。

「戦争のせいで、日本語の勉強をしてはいけなくなったの」と言った。

「でも戦争はずっと先のことだって、父さんが言ったでしょう？」

「サユリ、戦争はもう起きてるの。悲しいけど、そうってしまったの。母さんたちが生まれた国と、今、私たちみんなが住んでいる国はこっち側とあっち側に別れて、もう友達じゃなくなったの。わかるでしょう？」

うん、私にはよくわからなかった。わかったのは、学校がなくなるってことだけ。学校がなくなったら、私はもう通えない。もう何もできなくなったって父さんが言った。お正月のお祝いも、映画も、演奏会も、お芝居も、何もかも。

父さんはコーヒークップを持って、ぼんやりしていた。

「父さん、私はもう読み書きの勉強はしないの？」

「もちろんやるさ！」父さんははっきりと言った。

「学校がないのに…」

母さんはかまどから離れて、私のとなりにすわった。

「サユリ、子供は心配しなくていいの。私たちが何とかするから」

「父さんが教えるよ」父さんが言った。「おまえはちゃんと読み書きができるようになる」

「いつ？」

「すぐに始めよう。ただもう何日か待つんだ。カイコが眠るから、そうしたら時間ができるから」

私はその時間ができるのを待った。でも、カイコがえさをほしがらなくなったら、ロバがほしがって、野菜もほしがって、地面もほしがる。そしてもし地面の世話をしなかったら、私たちが食べるものはなくなってしまう。

母さんが空いてる時間を見つけて私に教えようとしてくれた。この線は何？ちょっと待って、サユリ。お前の父さんが呼んでるから、とうもろこしを穀物倉庫にしまうのを手伝わなくちゃ。ちょっと待って、鍋を火にかけたところだから、こげないようにしなくちゃ。もうちょっとで洗濯がすむから。もう少ししたら、見てあげるね。もう少ししたら、カイコが目覚まして、えさをずっとほしがる。

何とかするから心配するな。父さんは毎日のように言い続けた。

神さまたちに願いごと

父さんたちはいつも神さまにお願いする。お金が必要？神さまにお願い。からだのこと？ご加護？幸運と幸福の神さまに願をかける。ほかにもたくさんの神さまがいるって母さんは言う。何にでも神さまがいるって。木にも、川にも、雲にも、動物にも…ご先祖さまたちにもお願いする。

父さんは雨が降るよう、きっと何度もお願いしたんだわ。雨の神さまに、それとも雲の神さまに？桑の木も、草も、ユーカリの木も、ぜんぶ雨のペールに包まれる。

〜〜

「サユリ」母さんが台所から私を呼んだ。「これをお供えしてちょうだい」母さんは柿がのった2枚の小皿を私に手渡した。うちの柿の木はよく熟した

甘い実をつけていた。

どんな食べものも、どんなおやつも、母さんはまず神さまとご先祖さまにお供えする。神さまやご先祖さまは私たちを守ってくれる。母さんはこんな風に言い聞かせる。もし根っこを切ったら、木は死んでしまうでしょう？ご先祖さまは根っこのようなものなの。そして私たちは木の枝のようなもので、根っこがなければ育つことはできないの。母さんはいつもこんな話ばかりしている。

あなたは何だって好きなことをお願いしていいのよ。ある日、母さんが言った。本当に何だっていいの？全部？全部？全部よ、あなたがいい子にしていればね。ああ、母さんはいつだって同じことを言う。私はいい子じゃないの？いい子でしょう？だって、母さんに言いつけられるお手伝いは全部やるもの。そりゃあ、ときどき忘れることもあるけどね。

一度、お供えもののおかしをかくれて食べたことがある。そして本をとって、かくした…神さまとご先祖さまたちはおこったかしら？私の願いごとを聞いてくれないかしら？

おじいちゃんたちの写真の前に柿のお皿を一枚置いた。そしてもうひと皿はもっと上のほうにある神棚へ。手が届くように椅子にのぼった。それから願いごとをした。「授業がすぐに始まりますように、本がすぐに戻ってきますように、すぐに読み書きできるようになりますように」私は、毎朝母さんがお供えしているごはんとお茶を私が持ってくることを約束した。もうひとつ、畑で一番きれいな花と葉っぱを摘んでくることも。

外では雨が降り続いていた。私は窓からアボガドの木を見た。葉っぱは傘みたいだけど、こんなにたくさんの雨をもちこたえられるかしら？本は大丈夫かしら？お願い。神さまとご先祖さまたちが私の願いごとを聞いてくれますように。

朝になると雨はやんでいて、空は青く、草と葉っぱには大きな雨だれがきらきら光っていた。洗わなくちゃいけない服がたくさんあった。私とエミコ

姉さんが服をつるしていくと、洗濯ひもは色とりどりになった。そうして朝は飛ぶように過ぎた。

私たちがお昼ごはんを食べ終えようとしていると、外から手をたたく音が聞こえた。お客さん？私たちは顔を見合わせた。私はお皿にスプーンをおいてじっとしていた。あの男たちかしら？本を探しに来たのかしら？でも見つけることなんかできない。ああ、でももし私のマットレスの下を見たら？どうして私はあんなに簡単なところに隠してしまったのかしら？

「こんにちは！」

よかった。となりのおじさんの声だった。

「シンの父さんだ」ユキオ兄さんが言い、みんなはホッとした。誰かが手をたたくと、いつもこんな風だった。みんな動けなくなっていた。父さんが立ちあがってドアに向かい、母さんもついて行った。私は窓に近づいてのぞいた。

「タナカさん！お入りになりませんか？」

「いえ、お気遣いなく。お知らせがあつて来たんです」

おとなたちはあたりを見わたしながら早口で話していた。話しているところを見られるのがこわいのかしら？でも誰かがこの近くを通ることはあまりない。大きな道は離れているし、ユーカーリの木の間にあるから、家からは見えない。

「うまくいきました。何とか授業をやれそうです」タナカさんはうれしそうに言った。

「無給でやってくれる人が見つかったんですか？」

「ええ。若いのが何人か、週2回の授業を引き受けてくれたんです。目立たないようにグループごとに1か所に集まります。そしていつも同じ家ではいけません。人目をひいてしまう」

「私たちはサユリのことが心配だったんです。ユキオもまだまだ勉強せねばならん。いつから始めるんですか？」

「来週の火曜と木曜に。最初の授業はサカイさんの家です」

「来週？それはありがたい。早ければ早い方がいい。子供たちに勉強させないわけにはいかん。中に入って、お茶でもいかがですか？」

「ありがとうございます。でも、ほかにも回らなくちゃいかなので」

タナカさんは急いで頭を下げながら別れのあいさつをした。父さんたちも同じように頭を下げながらお礼を言った。おとなたちは頭を下げたり、上げたりするのが本当に好き！そして私が忘れるたびにエミコ姉さんが注意する。サユリ、おじぎなさい。

授業が始まるって？本当に？学校でやるんじゃないって。大丈夫。夜だって。それも大丈夫。まるで足が遊びたがっているかのように私は歩き出して、裏庭へ行き、木の枝で地面をひっかいた。めんどりたちがそれを見て、また地面をつつき始めた。グアバの木では、枝にぶらさがったり、つるつるした幹に抱きついたりした。私の願いごとがかかったのよね？神さまたちにお礼を言わなくてはいけなかった。ご先祖さまたちにも。

あの朝、目が覚めるとハチドリが窓から入って来るのが見えた。居間をぐるぐる回って、小さな翼をぶんぶん動かしていた。そして、外へ出ていった。そんな風に、あの知らせはやって来た。まるで窓から入って来た小鳥のように。

「サユリ、そこにいるの？家のはき掃除を忘れないようにね！ほかに頼んだこともよ」

みんなは桑の葉をつみに出かけるところだった。

「わかってる、母さん」

私は台所へもどって、ほうきをつかんだ。それを持って家じゅうぐるぐる回った。それからコップにバケツの水をいっぱい入れて、土間にまいた。そうすれば、ほこりがあまり立たないからって、いつも母さんが言う。私は歌いながら家じゅうほうきをかけた。私の足はまるでじっとしていたくないみたい。

あとで、せんとく物を取り込まなくてはならなかった。もっとあとでね。部屋へ行くと、本が私を待っていた。すぐに、すぐに読めるようになる。線

がたくさん引いてあるページに何がかくれているのか、私は知りたくて仕方なかった。しばらくのあいだページをめくっていた。

太陽がユーカリの林の方にしずみ始めた。私は洗濯物のことを思い出した。ほかに何を頼まれていたかしら？火をつけるために木の枝を拾うこと。そう、そうだった。

ランプのあかり

山みたいな線がひいてあって、こっちは川みたい。それとも雨？これは木かしら？多分、枝？何にも似ていないのもたくさんある。私は本をめくる。さかさまにしてみる。誰かがとんぼがえりしてるような字もある。だいたい私の本の表紙には何を書いてあるのかしら？授業が始まることになったから、じきにわかるようになる、じきにね。

～～～

母さんが斜めがけのかばんを縫ってくれた。そしてその中にノートを1冊と鉛筆を1本と消しゴムをひとつ入れてくれた。

「サユリ、ノートは大事に使うのよ。父さんがお店でノートを何冊も買うのはむずかしいんだから」と言った。

「勉強するためだろうって疑われるかもしれないからね」エミコ姉さんが言った。

「わかってるわ、母さん。私、裏庭の地面で練習するから」

「いい考えね」姉さんは言った。「でもその後で忘れずに消すのよ」

「学校用のかばんをかくしておく場所を探さなくちゃ」母さんが思いつき、私たちはどこをかくし場所にするか考え始めた。

「ベッドの下なんかじゃあ、簡単に見つかってしまう」ユキオ兄さんが言

ったので、私は不安になった。あの場所から本を取りださなくちゃ。それもすぐに。

私たちは家じゅう探しまわった。埋める？それは無理。だって、勉強道具はいつも必要なもの。

「薪のそばはどうかしら？」エミコ姉さんが言った。

みんなで見に行った。小屋には私たちがお風呂にしているドラム缶があつて、壁で仕切ったところに火をつける場所がある。そこに薪が積み重ねられていて、ついで編んだかごが、わらや細い枝と一緒に置いてあつた。

「かごの中がいいかも」

やっと決まった。うんと奥の方に入れて、しっかりとおいをしてあげば、見つかることはない。誰かがわらや細い枝をどけなければね。

「ユキオとサユリは忘れないようにね。授業がないとき、それもお昼のうちは、かばんをここにかくしておくのよ。わかったわね？」

私とユキオ兄さんは、はいとうなずいた。父さんもそこが私たちの勉強道具をかくしておくにはよい場所だと思った。

~~~~~

コンゴウクイナの鳴き声が沼地を出て、草むらを横切る。なんて変わった鳴き声。私はひとつ知っている。コンゴウクイナが鳴けば、昼はいなくなつて、夜がやってくる。

~~~~~

「サユ！母さんが晩ご飯だって」ユキオ兄さんが台所の方から叫んだ。「今日は授業があるよ！」

兄さんはそんなこと言う必要があつたのかしら？もっと早くから私はそのことばかり考えていた。もっと早くから私は空を見上げていた。じわじわと動く太陽が沈み始めるまで。私は台所まで走って行った。

「用意はできた？」母さんは夕飯をテーブルに並べていた。

「父さんとエミコ姉さんは？」

「まだ農場よ。待たなくてもいいわ」

私はよくかまず、ほとんどのみこむようにして食べた。目玉焼きをのせたご飯はとてもおいしかった。いつもいやだと思っていたハヤトリまで違う味がした。食べ終わると、かごの中にかくしてあったかばんを取りに行った。

暗やみがすぐにすべてをおおった。めんどりたちはもうねぐらに入っていて、カエルがゲロゲロ鳴いていた。ユキオ兄さんがランプに火をともし、私たちはドアのところで待っていた。空を見上げると、今晚は半月だった。

いくらもしないうちに私たちの方へ向かってやって来るふたつの灯りに気づいた。みんなだ。もっと近くに来てから、ハナエと弟のシンとセイジがいるのがわかった。

「ふたりとも、準備はできてる？」ハナエが言った。「最初の頃は私もこの子たちと一緒にいくことにしたの」

「よかった、それだと安心だね。ありがとう」母さんはお礼を言って、私たちの方を向いた。「ふたりともハナエの言うことを聞くのよ」

後ろにとりのとなりに住むナミがいて、もうひとり、ユキオ兄さんよりずっと年上の男の子がいた。村の何かの祭りでその子を見たことがあるのを思い出した。

ハナエも数にいれると、みんなで七人だった。

「サユリ、行くわよ」

暗やみがこわくなってきていたので、ハナエが一緒に本当によかったと思った。ランプの灯りだけが道をてらしていた。

草むらは昼間よりずっと背が高く見えた。木の影はなんてへんてこりんなの！そして、もっとやっかいなのはふくろうの鳴き声。向かっている先には暗闇があるだけ。

ハナエが私の手をにぎってくれと、こわいのが少しましになった。しばらくすると目が慣れてきて、まわりが見えるようになった。男の子たちはいそぎ足で歩いていた。ユキオ兄さんも、ほかの男の子と一緒にあって、私のことを忘れていた。ハナエが言った。

「もっとゆっくり！」

男の子たちは言うことを聞いた。よかった。あんまり急いで歩けないんだもの。私はくつをはいて歩くのに慣れてなかったから（家ではずっとサンダルだった）、はだしで歩こうかと思ったけれど、とげを踏むのがこわかった。

遠くに小さな灯りが見えた。あそこで私たちは最初の授業を受けることになっていた。その家のおじさんが入り口で私たちのことを待っていた。

「さあ、さあ、中に入って。先生はもうおみえだよ」

居間は私の家より少し広かったけれど、同じように土間床で板壁だった。棚がいくつかあったけれど、本は1冊もなかった。ランプがひとつだけ。私たちは自分たちのランプをそれぞれ隅に置いた。三つのランプで部屋はもっと明るくなった。部屋の真ん中に太い木の幹で作った長いテーブルと背もたれのない椅子が四つあるのが目に入った。その家で一番年下の男の子と3人の生徒が待っていた。そのそばにやせて背が高く、黒ぶちのメガネをかけた若い男の人がいて、私たちに笑いかけていた。

「こちらがみんなに勉強を教えてくれることになったお兄さんだ。今日からはシマダ先生だ」おじさんが紹介した。

「みんな来ることができてよかった」その声は小さかった。まるで緊張しているみたいに。

この人が私たちに勉強を教えてくれるの？とっても若い！

先生の声は強くしっかりとしたものになった。

「勉強をせずに過ごしているわけにはいかないんだよ」そしてすぐさま私たちが座る場所を決めていった。「1年生はここ」

1年生？私のことだわ。ナミが私のとなりに座り、ふたりの男の子が私たちと向かい合うように、テーブルの反対側に座った。

「2年生？こっちだ。3年生と4年生はあっち側」

私は横目でうかがうようにして、先生を見た。その落ち着いたしぐさが気に入った。先生は本を何冊か持って来ていた。どこにかくしているのかしら？私と同じようにマットレスの下かしら？男たちがやって来るのがこわくないのかしら？きっといいかくし場所を見つけたのね。

先生は年長の子供たちに教材をわたすと、私たちのグループのそばに来て座った。

「文字にはかたかなとひらがなと漢字のみつつがあって、漢字は意味を表しているんだ」先生が説明した。

母さんは、もし私がひらがなを覚えれば、漢字を知らなくてもたくさんの本を読めるようになると言っていた。シマダ先生は教えてくれるかしら？先生はたくさんのことを知っているように見えた。

「今年はかたかなだけ勉強しよう。一番簡単に書ける字だからね」

読めるようになるのはまだ先のことだってわかった。それでもかまわなかった。私はとても幸せだった！

勉強しているんだもの、1年生として。

私は裏庭の地面に線を描いていく。棒きれを使って、先生に習ったことを思い出しながら、大きな線を引く。いろんな線のかき方で。上から下へ、左から右へ。まっすぐの線、曲がった線、雨だれみたいな線。こんな風に地面に書いて勉強するのは楽しいけれど、あとで消さなきゃいけないのが残念。自分の字を見るのが好き。ゆがんでいるけど、私の字。

私は急いで家のお手伝いをやってしまう。とうもろこしをめんどりにあげて、卵を拾い集めて、洗濯物を干して、家を掃いて、野菜を洗って…ほかに何があったかしら？

お手伝いが終わるとすぐに裏庭へ行って練習する。私はもう書けるようになっていた。イエ、トリ、サカナ、アサ、ミチ、クサ。消しては、また書いていた。

洗濯物を取り込むあいだずっと、私はもっといい本のかくし場所がないか考えていた。部屋にあるのはふたつのベッドと、壁棚と、服をしまうための大きな箱だけ。服のあいだは？きれいい好きのエミコ姉さんがいつも片づけている。きっと見つけてしまうわ。

部屋の外は？古いおなべがしまっている台所のパントリーのなかは？母さんに見つかってしまう。穀物倉庫のとうもろこしのあいだは？やっぱりだめ。

父さんが見つけて燃やそうとするわ。家の外のグアバの木の枝にはさむのはどうかしら？うんと高いところ。でも雨が降ったらどうしよう。

洗濯ひもにぶらさがった洗濯物はお日さまを浴びすぎてカラカラになっていた。私はそれを全部たたんで、それぞれの場所にしまった。私の本の一番いいかくし場所を思いついた。私のベッドのマットレスにはすこしほつれたところがあった。そこをもうちょっと開けたら、そのすきまは本を入れたり、出したりするには十分だった。マットレスを立てかけたって、本は見つかりっこない。誰かが見つけるのはうんとむずかしいわ。

それから私は台所へ行った。そのうちにみんなが農場から戻って来ると、米を洗って、じゃがいもの皮をむいておくよう母さんに言いつけられていたことを思い出した。ほかにもあったかしら？お風呂もわかさなくちゃ。それは新しい仕事だ。前まではユキオ兄さんがやっていて、私はそのお手伝いをしていた。

父さんは私にできるかどうか、やけどしたりしないかどうか心配した。大丈夫よ、父さん。私にもできるようになったわ。ユキオ兄さんを手伝うとき、私にもちゃんと火が使える。火は私の思いどおりになるの。兄さんよりじょうずよ。赤い火がついて、消えそうになると、いそいそもっとたくさんの木の枝やわらを投げこむの。すごく楽しい。気をつけるんだよ、火は遊び道具じゃないんだから。父さんが言った。

～～～

もう 10 ページくらい、いっぱい書き込んでいた。すぐに使いきってしまったように、私は小さな字で書いていた。火をつけようとまきを動かしていたとき、いいことを思いついた。大きな木の切れはしの次に小枝を入れて、それからわらをつかもうとしていたときだった。わらをじっと見て、そのうちの 1 本をわって開いてみた。ノートみたいじゃない？木炭がころがっている。先がとがったのをいくつか拾って、わらにこすりつけてみた。

もっと大きくて、太いわらを探した。何ていい考え！わらが字でいっぱいになっていった。ハナ、イエ、クモ、キ。もっと、もっと。トリガナク、サ

カナガオガワヲオヨグ、カエルガナク。でも忘れてはいけなかった。焼かなくちゃ。でも明日、と私は考えた。今日はもう男たちはやって来ない。暗くなってきたもの。私はかごの奥にそれをかくした。

ほかの日にも私は書いた。炭で字を書いたわらがいっぱい。私はそれをぜんぶかごのなかにある新しいわらの下にかくした。

でも、ある日の午後、私がヤマイモの皮むきにもたついていると、母さんとユキオ兄さんが先に戻って来て、兄さんがお風呂に火をつけに行った。

「母さん、字が書いてあるわらがいっぱいあるよ。サユ、お前だろ？」

「サユリ、焼いた方がいいわ。こんな風にとっておいてはだめ」母さんが言った。

私は走ってそばへ寄った。自分でやりかった。ユキオ兄さんが火をつけようとしていた。

「私にやらせて」

兄さんが家に入って行くと、私は字を書く練習に使ったわらをぜんぶ集めた。赤い火が私の魚や家や、歌っている鳥をうれしそうにのみこんだ。いいわ。私はもう書けるんだから。クモ、アメ、カエルガナク。明日はもっと書くんだから。そしてすぐに焼いてしまうんだから。

(後篇に続く)

原典 Lúcia Hiratsuka, *Os livros de Sayuri*, São Paulo: Edições SM, 2008.

注

- ¹ ルシア・ヒラツカに関する伝記的情報は、ヒラツカ自身が開設、運営しているポルトガル語のウェブサイトから入手した。
<http://www.luciahiratsuka.com.br/index.html> (2012/01/08 アクセス)
- ² 「につけい文芸賞」は1968年、ブラジルの日系社会における文学活動の活性化を目的として、ブラジル日本文化福祉協会（文協）によって創設されたものである。なお、文協はサンパウロ市リベルダーデ区に本部を有する、ブラジル日系社会の中心的機関である。
- ³ 文協の公式ウェブサイトにて2009年12月16日付け、掲載されたセリア・アベ・オオイの記事から訳出した。
Célia Abe Oi, “No Salão Nobre, a outorga do Prêmio Literário Nikkei 2009,”
http://www.bunkyo.bunkyonet.org.br/index.php?option=com_content&view=article&id=793%3Ano-salao-nobre-a-outorga-do-premio-literario-nikkei-2009&catid=54%3Anoticias-2009&Itemid=122&lang=br (2012年1月10日アクセス)
- ⁴ 同上。
- ⁵ この翻訳は、非営利目的であることを条件に、訳者が直接、著者から許諾を得たものである。
- ⁶ ブラジルの食卓に欠かせない豆の煮込み料理で、ご飯にかけて食べる。